

学校教育ビジョン										
【学校教育目標】 「自分も人も大切にできる きんひがの子」 ～夢をもち、心豊かに、自ら学び行動できる児童の育成を目指して～				1. 教育活動に関する重点努力事項 ① 確かな学力、豊かな心、健やかな体の育成 ～知・徳・体のバランスのとれた児童の育成～ ② どの子ども安全・安心に学べる学校づくり			2. 学校経営に関する重点努力事項 ① 組織的な学校運営 ② 教職員がやりがいを感じながら、生き生きと働ける学校づくり			
評価の項目	今年度の重点目標	具体的取組	主担当	現状及び取組状況	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考	判定結果 (中間)	判定結果 (最終)	今後の改善策
①教育課程・学習指導	「子どもに委ねる授業」に取り組む。	・教育課程の工夫(カリキュラムマネジメント)に取り組む、「子どもに委ねる授業」の実現をめざす。 ・BE THE PLAYERプランの計画・実行。 ・児童自身が「自分で」「自分から」取り組む意識を育むために、学習集会や振り返りなどの機会を設ける。	教務主任 研究主任	言われたことには、素直に取り組むことができる児童が多い。一人一人が「自分で」「自分から」学習に向けて方法を選んだり、進んで取り組んだりすることに課題がある。	【成果指標】 毎月の職員の手立て取組チェックシートに○をつけ、各自で取組を振り返り、意識を高める。○の割合80%以上を目指す。	「子どもにとって委ねる授業」の実現に向けて取り組んだ教職員の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	教職員取組チェックシートを毎月行い、チェックする。	A		毎月のチェックシートでは、すべての職員が「子どもにとって委ねる授業」に向けて取り組んでいた。中でも「委ねる場面での机間指導・支援」、「一人一人に認める声掛け」は全員ができていた。単元の中で「教師4割児童6割」はまだ30%程度の教員しか取り組めていない。この点の数値が上がるように、今後は、研究と連携してゴールの姿に向けた単元計画の具体を共有し、単元内で委ねる場面を増やせるようにしていく。また、児童が学習を自分のものと考えて取り組む意識を育んでいく。
②生徒指導 ※いじめの未然防止	児童を主とした「自分もみんなも楽しい学校」づくりを支える。	企画委員を軸として、「自分もみんなも楽しい学校」にするためにどうすればよいか、児童に考えさせる。各月の生活目標をもとに委員会全体で達成するための行事を企画する。	生活健康部	素直で真面目な児童が多く、先生に言われたことはできるが、自分から行動を起こす児童はほとんどいない。自分たちで学校を良くしようとする意識を高め、自分たちで考えて主体的に行動させていく。	【満足度指標】 児童アンケートを行い、「自分もみんなも楽しい学校」づくりを力を入れたかどうか振り返らせる。	「自分もみんなも楽しい学校」づくりに進んで取り組んだという児童の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	1学期末と2学期末に児童を対象にアンケートを行う。	B		「みんなが楽しい学校にするために、あなたががんばっていることはありませんか?」に「ある」と答えた児童は87.7%だった。がんばっていることの項目で多かったのは「休み時間に友達をあとびにさそっている」で全校の41%である66人チェックしていた。一方で「自分からあいさつをしている」の項目を選んだ児童が全校の20%である42人にとどまった。企画委員が挨拶の活動をしているものの、全校のあいさつの意識は低いのが現状である。あいさつの意識を高めていき、全校が楽しく学校生活を過ごせるように、企画委員を中心としたイベントを企画していく。
	いじめや不登校の未然防止のため、生徒指導の4つの視点を生かした授業に取り組む。	生徒指導の4つの視点を生かした授業づくりに取り組む。チェックシートを活用し、具体的な声掛けや、働きかけの方法を示す。必要に応じて児童アンケートを取り、児童の実態に即した取り組みになるようにする。	生徒指導主事	毎月のチェックシートでは、自己決定の場の提供、自己存在の感受の達成率がどちらも84%で、内容を見ると、「思考過程をノートに残す」「どの場面でもどの子どもの意見を活かすか考えておいた」という項目が低かった。	【努力指標】 毎月チェックシートに○をつつけ、各自で自分の取組を振り返り、意識を高める。学期に一度、児童の実態に即しているか見直し、必要に応じてシートを改善しながら取り組む。	児童の実態を把握しながら生徒指導の4つの視点を意識した授業に取り組んだ教職員の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	教職員にアンケートを行う。	A		「児童の実態を把握しながら生徒指導の4つの視点を意識した授業に取り組んだ。」に「取り組んだ」「まあまあ取り組んだ」と答えた教員が合わせて100%だった。どの教員も毎月のチェックシートを振り返りながら、日々の授業を意識していると考えられる。ただし、一方で、「取り組んだ」と答えた教員は46%にとどまっており、どの教員も確実に取り組んでいるとは言いがたい。2学期末の教員アンケートですべての教員が「取り組んだ」と答えることができるように、毎月のチェックシートを振り返り、授業につなげることができるように、各教員への声掛けや、チェックシートを活用にした研究などを進めていく。
③キャリア教育・進路指導	目標をもって生きようとし、自分の成長を振り返ることができる児童を育てる。	1年間を通して核となる授業や学校行事を通して、自身のキャリア形成について考える機会を学期に2回以上設ける。	学習指導部	教職員が児童の1年間の成長具合を見る機会があまりなかった。児童においては、自分の課題を見つけたり、目標に向かって粘り強くやり遂げたりすることに弱さを感じる。	【満足度指標】 キャリアパスポートでの振り返りを通して、自分の成長に気づかせる。	「授業や行事で、目標を達成するために頑張ることができた」に「よくできた」と答えた児童の割合が、 A 90%である B 80%以上である。 C 70%以上である D 70%未満である	1学期末と2学期末にキャリアパスポートで振り返りをさせる。	A		キャリアパスポートで「目標を達成するために頑張ることができた」に「よくできた」と答えた児童は66、2%だった。また「できた」と答えた児童の数と合わせると94、3%だった。「できなかった」と答えた児童はほとんどいなかったため、今後は行事の後だけ振り返りをするのではなく、目標を常に提示して達成できているかをふりかえり、またできていたところは価値づけて自信に繋げていく。
④保健管理	メディア・コントロールや、メディアを使用する際の姿勢改善への意識向上に向けた指導の充実を図る。	・年に3回メディア・コントロール週間を実施し各学級で実態に応じた事前指導をする。 ・メディア使用と心身の健康の関係について、関心や危機感をもてるよう児童・保護者へ働きかける。	保健主事	昨年度までの取組により、多くの児童がメディアの長時間使用が体に害があることを理解しメディア・コントロール週間に実践できる児童の割合は増えてきているが、普段からの継続が難しい児童が多い。平日2時間以上メディア使用・・・昨年度1学期末は59%、2学期末は54%	【成果指標】 健康に留意しながら、メディアを使用することができる児童の割合80%以上を目指す。	「健康に気をつけてメディアを使用することができた」と答えた児童の割合が、 A 80%以上である B 75%以上である。 C 70%以上である D 65%未満である	6月と12月のメディア・コントロール週間後にアンケート調査を行う。	A		アンケート結果は、学校全体で82%だった。6月にメディアをテーマにした学校保健委員会があった後のアンケートであったため、参加した3年生以上の子ども達の意識としては高い傾向にある。ただ、校内で目安として提示している「平日は1日1時間まで、土日は2時間まで」について、メディア・コントロール週間に実践できた割合は学校全体で43%であった。特に低学年でコントロールが難しい児童が多みられた。2学期以降も集団指導や個別指導を充実させていく。引き続き保護者へもメディアの長時間使用について問題提起しながら望ましい生活習慣確立への協力を依頼していく。
	児童の発達段階に応じて、柔軟性の向上を目指す。	・全学年共通の準備運動として、ストレッチや体幹トレーニングに取り組ませる。 ・縦割り活動や委員会活動のイベントを通して、楽しみながら運動する場を設定する。	生活健康部	昨年度の新体力テストで、柔軟性の項目において県平均に達している児童が19%しかいない。	【成果指標】 柔軟性の項目において、県平均に達する児童の割合が40%以上を目指す。	新体力テストにおいて、柔軟性の項目で、県平均に達している児童が、 A 40%以上である B 30%以上である。 C 20%以上である。 D 20%以下である。	・5月に1回目の計測を実施する。10月～11月の間に計測を実施する。 ・全校で取り組む。	A		新体力テストでの柔軟性の項目で県平均に達している児童の割合は、4年男子36%、5年男子67%、6年男子25%、4年女子33%、5年女子45%、6年女子45%であった。全体の達成率としては42%であったが、特定の学年だけではなく全校の柔軟性が向上することを目指していく。1学期には全校の体育授業でストレッチに取り組んだ。2学期は、ストレッチの継続と家庭でも実践してもらえよう学校での取り組みやストレッチ方法について知らせ、協力・依頼していく。
⑤安全管理	自分の命は、自分で守ることができるよう、いざという時には自ら考え判断して行動する児童を育てる。	各学期に1回以上、避難訓練を実施し、適切な経験を積み重ねる。	教頭 安全教育担当	避難訓練の際、指示に従うことはできるが、自分で考え正しい行動をとることが難しい児童が見られる。	【満足度指標】 自分の命を守るためにどうしたらよいのかを自分で考え行動できる。	自分で考え適切な行動ができた児童が A 95%以上である。 B 90%以上である。 C 85%以上である。 D 80%未満である。	避難訓練後、児童に振り返りのアンケートを行う。	A		火事が起きた場所、避難場所は、ほぼ100%の児童が、把握できていた。放送や指示に従えた児童は100%だった。また、あわてず落ち着いて避難できた児童も、一人(あまりできなかった)以外全員だった。2学期には、休み時間の地震避難訓練を行い、より自分で考え行動できるための訓練を行う。
⑥特別支援教育	個々の児童の特性を理解し、必要な支援を行いながら、多様なあり方を児童が認め合えるように働きかける。	・支援を要する児童について個別の記録をこまめに残す。 ・専門家を招いての、校内研修会を持ち、児童の特性への理解を深める。 ・児童が、特性を持つ友達を温かく、当たり前に受け入れる環境づくりに努める。	特別支援 教育コーディネーター	・どの学級にも特性があり、個別の支援を要する児童が在籍している。 ・学級で困り感の強い児童については、校内支援委員会を持ち、専門相談や医療につなげている。 ・今年度は特別支援学級に在籍する児童が増えた。	【努力指標】 研修会や児童理解の会を持ち、支援の方法について全職員で検討して共有し、児童の支援に生かすことができる。	多様な特性や相互理解を深める方法について学び、児童の支援に生かすことができたと感じた職員が、 A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	教職員にアンケートをとり意識調査を行う。	A		児童理解の会を月末の打ち合わせの後に移したことにより、十分な時間が取れるようになった。情報を共有できたので、異学年でも対応できた。校内支援委員会や専門相談、毎週水曜日に勤務してくれる特別支援地域サポート教員との懇談や相談で具体的な支援の仕方を考えることができ、実践している教員が多い。また、特別支援学級の新入児童については、担任が市教委や関係者との情報共有に参加し、毎日の支援に生かせた。2学期も専門の方からの助言や研修会の機会を設けた。
⑦組織運営・業務改善	明るく元気に児童と向き合うことのできる心身ともに健康な教職員の姿を目指す。	業務の見直しを進め、精選と合理化を行う等の工夫をし、自らの働き方について考える。また、連携・協同を進めることで、業務改善に努める。	教頭	業務の精選、合理化連携を感じている教職員は、63.3%であった。ますます忙しくなっていると感じている教職員が多かった。	【満足度指標】 業務の精選(削減)、合理化、分掌内での連携を工夫しながら推し進め、業務改善を行う。	自らの働き方を考え、工夫して改善を行っていると考える教職員が A 95%以上である B 85%以上である C 75%以上である D 75%未満である	教職員にアンケートを行う。	D		工夫・改善して業務を行っている職員は、71、4%。優先順位を考えたり、重要度を考えて取捨選択しているが、難しい。業務が煩雑で多岐にわたって多くあるとの意見があった。また、連携分担がうまく機能していない面もある。時間が多く取られている業務を洗い出したり、分掌内の分担を考えなおしたりして、業務改善を進める。
⑧研修	国語科を中心に授業改善を図り、研究主題である「自ら課題を見つけ、主体的に学ぶ子の育成」を目指す。	国語科「読む」単元を主として、単元デザインシートを活用することで、学習指導要領をもとに付けたい力、単元末の児童の姿、言語活動、子どもに学びを委ねる時間を設定するなど、児童が自律した学び手となるよう授業を構想する力を付ける。	研究主任	研究初年度ということで、国語科の授業のつくり方が共有されていないため、単元デザインシートを活用して全職員が共通実践を進める中で授業改善を図っていく必要がある。	【満足度指標】 「自分から課題やめあてに向かい、主体的に学習に取り組んだ」かどうかを児童に振り返らせる。	自ら課題を見つけ、主体的に学ぼうとしている児童が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	1学期末と2学期末に児童を対象にアンケートを行う。	B		児童アンケートの結果、自ら課題を見つけ、主体的に学ぼうとしている児童の割合は88、6%であった(そう思う:42、1%、どちらかといえばそう思う:46、5%)。毎月のチェックシートで「子どもにとって委ねる授業」に向けて取り組み、児童の主体性を尊重した学習を教員が意識している。また、国語科においてプレイヤープランを活用して単元を見通した授業を行うとともに、読むこと単元において単元デザインシートを作成し、言語活動と付けたい力をつなげている。今後は力が付いただけでなく、自立した学習者としての学び方を振り返らせることで主体性を育んでいく。
⑨保護者、地域との連携	学校と地域(家庭)が目標を共有し、連携・協働しながら、児童の学びや成長を支える。	コミュニティスクールの活動を実働化させ、保護者や地域の方に教育活動に参画してもらう。	教頭	家庭や地域と連携した授業や活動の平均回数は、4.5回であった。総合や道徳の授業等でゲストティーチャーをよんだり、一緒に活動したりした。	【努力指標】 家庭や地域との連携による授業や活動を、年4回以上行う。	連携した授業や活動が各学年 A 年5回以上できた。 B 年4回以上できた。 C 年2回以上できた。 D 年1回以下であった。	回数のチェックを行う。	C		1学期(中間)はC(2回)であったが、年間を通しての回数を数えるので、今後も連携した授業や活動を推進していく。道徳や地域授業でゲストティーチャーをおよびしたり、実技教科を中心とした支援者を募ったりする。
⑩教育環境整備	児童が安全に、また、教職員が効果的・効率的に教育活動を行うことができる環境を整える。	全教職員による備品・教材整備を計画的に行い、校内を整理整頓する。	教頭	昨年度、一昨年度と備品や教材の整理整頓、廃棄を行ってきた。かなり使いやすくなったが、壊れた備品や教具、使用しない教材が、まだ準備室や空き教室に残っている。	【努力指標】 全教職員で定期的に備品・教材の整理整頓を行う。	全教職員で備品・教材の整備を年間 A 3回以上実施した B 2回実施した C 1回実施した D 実施しなかった	実施状況を確認する。	C		1学期(中間)は、1回行った。2学期に1回、3学期に1回、計3回は、行う予定である。今年度は、PCルームをリフォームする「学び空間デザイン」を行うことが決まったので、それに向けて室内デザインを考えたり、廃棄したり整備したりしていく。
学校運営委員会での評価、助言	(中間) ・教科書にQRコードが付いている時代になった。学び方も変わってきたのでは。どんな授業をしているか。・・・もう一度復習したいところ、先取り学習を行いたいところ等、一人でQRコードから動画で学ぶこともしている。市がすすめている「自由進度学習」を実践している。 ・教職員の業務改善が行われていないようだが。・・・連携や分担で平準化し、工夫して改善していく。 ・朝の登校時、元気がない児童が多いように思う。スマホやタブレットの影響ではないか。コミュニケーションも上手くない。下校時は、元気なので心配していない。・・・学校でも朝は元気がない。夜更かししている児童が多いようだ。家庭と連携していく。					(期末)				